

の標本もその先端部を欠く為に正確な長さは確かめられない。幅は20~25 cm, 基部は円く, 余り心臓形は呈せず(アナメ *A. cribrosum* BORY に普通に見る様な scroll は見られない) 縁辺は全縁或いは幾分波うち或いは極めて短い刺状の突起を具えている。又中央には1本の中肋を貫通しているが中肋は幅1.5~2 cm 位あるも明らかに厚くなっている部はその中央附近のみでその葉面との境は余り判然としない事があり, 特に上部では余りはつきりしない場合が多い。葉面は平滑で皺なく薄い革状で大小多数の孔を有する。孔は略円形で幾分楕円形, 卵形のものも混り屢々孔の周縁は一方の面へ向つてまくれる。孔の配置には一定の規則は見られないが概して中肋附近のものが一般に大形で辺縁附近のものは小形である。大形のもの直径1 cm 内外ある。

子囊斑は葉面の中部辺の両縁に沿い両面に生ずるが後全面に広がる。

上述の性質から見て本種は北米バンクーバー附近に産する *A. fimbriata* HARVEY に近いものではないかと思われる。特に特異な茎の形態は即ち扁平にしてその両縁から根状附属物を発する点に於いて共通している。然しその葉面は大原産のものに於ては平滑で大小多数の孔を有するに反し *A. fimbriata* に於いては孔は殆んどなく又は甚だ尠く且つ葉面は平滑ではなく多数の皺を有する点等に於いて異なっている。依つてこの種には新たに *A. oharaense* なる学名を与え, 又この発見者なる大野磯吉氏の名を記念してオホノアナメなる和名を以つてこれと呼ぼうと思う。正式の記載文等は何れ規則に従つて記述する筈であるが取りあえず此処に此の新藻を紹介する次第である。

(北海道大学理学部植物学教室)

シルヴァ博士の来訪

瀬木 紀 男

緑藻ミルの研究で有名な, 米国イリノイス大学教授シルヴァ博士が, バンコックで開かれた太平洋学術会議の帰途日本に立寄られ, 忙しい旅程をさいて昨年12月5日小生を訪問した。

同氏とは7年振りに再会し, お互に旧交を温めた。かつて小生がパークレーの加州大学を訪れた時, パーペンフス教授の下で研究中であつた氏が,

当時日本ではまだ実験段階中であつたテレビを見に R. C. A. ビルに案内してくれたりした事が今更乍ら思い出されて懐しい。名古屋駅頭に降り立つた氏は小さな洗面袋とカメラのみと云う軽装であつた。ホテルで小憩後東山動植物園に案内したが、顕花植物にも深い造詣を持ち、真に自然を愛するの熱情をこめて、詳しく鑑賞し、又多くの質問を發したが、折よく温室主任がいて詳細に説明してくれた。ポインセチアの前では「おおクリスマス、フラワー」と叫んで非常に喜び、又サポテンの体に落書をみて顔をしかめたが、その中に米人の書いたものを発見して苦笑した。又庭石の前に来た時、之はボンサイ(盆栽)かと尋ね、此の日本独特の芸術に多大の興味を持つていた。

翌日、三重県立大学水産学部藻類学教室を訪れた。ここで志摩産ミルについて興味ある論議をなし、殊に *Codium magnum* とナガミルとの関係について注目すべき見解を示した。又ミルの標本鑑定を頼んだ処、更によく研究した後にしてくれと云つて氏の慎重振りを示した。その他ヒロメの標本をみせたが、外国にないので非常に珍しがつた。お昼頃、日本料理を会食したが、その席上偶然にもその店の女将がスキゼンシノリ(乾燥)を持つていたので、之を分けて貰い非常に喜んだ。お座敷での海藻採集に思わず苦笑し合つた。

午後米津の海苔場を見学に行つたが、潮時が悪くて、筵が海面上に露出していなかつたけれ共、舟にのつて筵を持上げよく観察し得た。何しろ斯様に盛大に養殖しているのは日本独特の技術であるので驚異の目を見張つた。帰途大学の大型乗用車が強風中、ぬかるみの小路(両側がきりたつてい)にスリップし、前進不能となつたが、巧みにバックして事なきを得たのは幸であつた。

再び名古屋に帰つて一泊し、翌日日本国名(相模、武蔵等)をローマ字で



三重県立大学にて
中央シルヴァー氏、左端岡田
弥一郎学部長、右端筆者

表示した地図はないかと尋ねられ、丸善其他を探したが見当らず、後日小生が写して送る旨約した。又陶器やのれん等日本の優れたデザインに興味を持ち、又洋服のモデル人形の顔が西洋人であるのをみて、何故東洋人のを使わないかと西洋依存に一矢を報いた。

三日間に亘る日程も何時しか過ぎて夕方愈々離名の時が迫つた。駅のプラットホーム迄行つても未だ話しが尽きず、列車発車の為め止むなく固い握手を交わし、再会を約して別れを惜しんだ。

(三重県立大学水産学部)

新 著 紹 介

稲 垣 貫 一 著

日本近海産ナガマツモ族の分類学的研究

K. INAGAKI: A Systematic Study of the Order
Chordariales from Japan and its Vicinity. Sci. Pap. Inst.
Alg. Res., Fac. of Sci., Hokkaido Univ., 4(2):
87-197, Figs. 1-83, Pls. I-XI, 1958.

日本近海のナガマツモ族植物は体の成長点に重点をおいた KYLIN (1940) の分類法によると、4科、17属、29種、16品種に分類されることが、この研究によつて明らかにされた。第1章は緒言で、第2章では、体の外形、枝分れの様子、体の基部、体の中軸、成長点、髄層、皮下層、皮層、毛、単子嚢、複子嚢の順に分類の標徴となる要点が述べられている。このなかで、著者は成長点にみられる特有の性質は体が発生の初期にある間だけ、はつきりしているもので、成体になると、現在伸長しつつある若い枝の尖端でも、もはや、成長点に特有な形が失なわれて、普通の枝の尖端の組織と殆んど区別ができなくなつてゐることを指摘して、この族の分類には春季にみられる1mm乃至2cm程度の幼体を詳しく観察する必要があることを強調している。第3章の種の記載の項では、かなりの種類について、このような幼体の観察が実際に行われ、体の発生の経過が詳しく述べられている。

記載された17属のうちに *Pseudochorda* という新属がある。これは、ニセツルモ *Chordaria nagaii* TOKIDA には、①毛がない、②単子嚢は同化糸の最下端の細胞にできて、細長い棍棒状の形をしている、③体が中空である、④第一次の基部が周辺に肥大癒合して二次的な基部をつくり、根様糸は基部の周辺か裏面からでる。などの点で、*Chordaria* 属と区別されるので、新属として、山田・時田両教授と連名で発表されている。また、ネバリモ属を2つの節に分け、体が中空で、髄層が多角形の細胞で網状になつ